

学力の基礎をきたえ どの子も伸ばす研究会ニュース

NO. 347

学力研の広場

2024. 2. 4

学 力 研 発 行

常任委員長 岸 本 ひとみ

郵便振替 00920-9-319769

教員不足が解消しない中、この春の教員の確保も危機的な状況が懸念されるとして、文部科学省は都道府県などの教育委員会に対し新たに確保できる教員数や不足解消に向けた具体策について緊急の調査を行うことになりました。

文部科学省の調査は、能登半島地震で被災した石川県など4県を除く都道府県と政令市の教育委員会が対象で、来月下旬までに回答を求めています。

具体的には

▽新年度が始まることし4月に向け、教員不足の解消のために取り組んでいる具体策や

▽どの程度の人数を新たに確保できるか

それに

▽来年度中に行う取り組みや、確保可能な教員数の見込みなどを調べることにしています。

文部科学省が去年4月に68の都道府県や政令市に行った調査では、全体の4割を超える29自治体が教員不足が前の年より「悪化した」と答えていましたが、その後も対策を講じていない自治体もあるということで、文部科学省ではことしの春も教員不足は危機的な状況が懸念されるとしています。

このため調査では、文部科学省が今年度の補正予算に5億円を計上した、大学や企業などと連携して外部人材を確保する事業の利用予定も調べ、利用しない場合の懸念についても聞くなど、各地域の取り組みの実態を把握し、新年度に向けて対策を促すことにしています。

2024年1月23日 21時37分 NHK ウェブニュースより

CONTENTS

◇特集 教員不足の現状とその対策◇

ONE TEAMで乗り越える	加藤英介	2
幸せにつなげよう	宮本 哲	4
個人的働き方改革のすすめ	吉田雅直	6
担任不足、教員不足の現状とその対策 学校現場がすべきこと	鈴木基久	8
先生が足りない	根無信行	10
教職員定数の抜本的改善・待遇改善をこそ	図書啓展	13
平教師でもできる、予防的な対策	堀井克也	15
教員不足の現状とその対策～そんなものはありません～	岸本ひとみ	17

◇連載◇

「どの子も伸ばす」を本気で考える④ 「意欲格差」に負けない! 公立小学校へ	岡本美穂	19
考える力をつけるための授業の組み立て方⑥ 同じパターンの問いを年間通してする効果	荒井賢一	22
社会科(歴史) 授業力アップ講座⑬ 教材研究①	深澤英雄	24
学力研 第十七期 先生のための学校(オンライン) 第五回報告	福島 尚	26
局長・常任委員長だより		29
学力研カレンダー		30

はじめに

今、勤務している学校は、児童数約千人と職員五十名近くの大規模校である。先生方の話を聞くと、地区の中でも教育困難校・生徒指導最前線と言われる学校だそう。今年度は、6年生40人を担任し、生徒指導主任と情報主任もしている。生徒指導部会では、子ども同士のトラブルや保護者対応、教員に對しての暴言・暴力などの先生方の困り感が課題として多く挙げられる。そんな日々を過ごす中で、心が疲れてしまったり体調が悪くなってしまうと学校に勤務することが厳しくなってしまう先生もいる。現状、三人四人…と様々な要因により、休まざるを得ない状況が続いている。このような事態に心配などは、子どもたちが落ち着かない状態もそうだが、教員間でのトラブルだ。言い合いになりずれが生じると、学校が機能しなくなる。そうなる前に、学校全体として取り組んでいる実践を紹介する。

共通理解すべきことを繰り返し伝える

生徒指導主任として常に伝えていることは「報告 連絡 相談」である。ハイソリツビの法則にもある通り、一件の大きなトラブルには三百件の小さなトラブルがある。職員会の情報交換の場や生徒指導部会でも担任であれば学年主任に報告する。事案によっては生徒指導主任や管理職に相談するということを繰り返し行っている。また、指導の方針も教員間でズレがないようにしている。

例えば、小学校であれば染髪やピアス、マニキュアなど直してほしいところはあるが、強くは言えないということが誰しも経験していることではないだろうか。今ままであれば「だめです。」の一言で済まされていたかもしれないが、その言葉は通用しない。学校に対して、理解のある保護者であれば聞いてくれるかもしれないが、難しい場合もあるだろう。もしかすると、新任や若手であれば正当なことを言えば言うほど、保護者の反感を買い、一年間がうま

くいかないということもあるかもしれない。では、どうすればよいのか。

先生方と共通理解を図ったことは大切なことは「保護者との信頼関係を築く」「理解と協力をお願いする」である。仮に染髪したとしても、それは外見の問題であつて内面は関係ない。保護者連絡をする前に、教師がその子のよさにどれだけ目を向けることができているのかという丁寧さが必要だ。普段の何気ない会話、友達への声の掛け方、授業中の成長など、保護者が知らない学校での様子をどれだけ伝えられるのが何よりも大切である。なぜなら、保護者も学校に対して「どうせ学校は…あの先生は…」と少なからず不信感を持たれていることがあるからだ。それを取り払うためにも十分に「保護者との信頼関係を築く」とことが大切である。その後、染髪をしたときのデメリット（健康面、非行面、友達関係、進路）について伝え、子どもの将来を考えたり親の願いを聞いたりして、理解を示しながら同じ方向に進められるようにする。その上で、学校としては「〇さんのよさをさらに輝かせるためにも元に戻してはどうでしょうか。」と丁寧に伝えることで、協力してもらえるようにする。

ONE TEAMを支える

先生も人間である。学級がしんどくなれば休みたくなる時もある。新米教師や真面目な先生ほど、心が限界に達するまで追い込んでしまう。そのような先生には、事前に「しんどかつたら、一日くらい休んでも大丈夫です。〇〇先生の体調が一番なので、学校のことには気にせず、まずは体を整えましょう。ぼくも休むときがあるので・・・」と伝えていきます。それは、一日二日であれば、学年間でやりくりすることが可能であることが多いからです。一番困ることは、急に休職となり、人が足らなくなることです。それを避けるためにも小さいうちに声をかけ、その先生の力が発揮できるようにサポートできるようにしています。

ただ、それでもうまくいかず休みに入られる場合もあるでしょう。もちろん、講師がいればよいのですが、この時期に決まることは、厳しいでしょう。そうなったときは、四役・主任が集まり学年の意向を踏まえつつ、方針を固めていく。「専科の先生や教務・校務先生が担任をする。他学年の先生の空きコマをもらい、授業をしてもらう。教科担任制をできるところで導入する。授業以外の場面では、なるべく全

職員で声をかけあつて支えていく。」というようにONE TEAMを進めるようにしている。不平や不満が出ることもあるだろう。休んだ先生に対して、心無い言葉を言う人もいるかもしれない。しかし、それを言ったとしても何かが変わるわけでもない。だから、今できること、最善を尽くせることに力を注いでいる。こういふときだからこそ、ONE TEAMで乗り越えることが、何よりも子どもたちのためにもなるのではないだろうか。

自分にできることについて

最近よく「自分にできることは・・・」と考えることが多い。最初にも書いた通り、中堅教員になると多くの仕事と責任がのしかかる。周りの先生は「〇〇先生はできるから大丈夫・・・」と言われるときもあるが、そんなことを思ったことは一度もない。厳しいクラスをもち、学年を支え、学校全体の問題と向き合いながら過ごすことは容易ではないからだ。有難いことかもしれないが、正直試験の連続である。そんな中でも心に決めていることがある。それは困っていたら「自分にできることはありませんか。

自分でよければやります。」とすぐに行動することだ。なぜなら、今まで自分が悩んだり大変だったりしたときにたくさん先生が支えてくれたからだ。また、この一言をかけてくれたらどんなに気持ちが悪くなっただろうと思っていたからだ。大きなことを成し遂げるために、小さなことを少しずつ積み上げていくために、自分にできることを考えながら今日もひたむきに取組んでいる。

おわりに

人員不足は大きな問題であるが、それでも学校にはたくさん子どもたちが目を輝かせながら登校してくる。学校全体としてできること、学年団としてできること、他学年としてできることなど、それぞれの立場で学校を支えていくことはできるはずだ。一人では乗り越えられない課題もONE TEAMであれば何とか乗り切ることができると信じて自分にできることを進めてはどうだろうか。その一員として、自分自身もできることを精一杯取り組もうと思っ。

幸せにしなげよう

大阪教育サークルはやし 宮本哲

「学校の現状」

私が教員の仕事を始めて四半世紀が終わろうとしています。この教員生活の中で年々教員不足が深刻になっていると感じます。

昨年であれば、四月の始業式前に担当外の先生が病休から退職に至りました。その後教育委員会に講師の依頼を続けましたが一年間、代わりの講師の先生が来ることはありませんでした。教育委員会も探しているとは言っていました。講師を依頼している学校の数が多く、順番からして私の学校に来ることは、ほぼないだろうという事でした。欲しいなら自分たちで探して下さいとのことでした。

そうなれば、校内人事の中で優先順位を考えなければなりません。私の学校では算数の五、六年生の少人数の担当が講師の先生が来るまでなくなりました。結局、一年

間、算数の少人数授業はありませんでした。

昨年の六年生は五年生の時も教員不足から算数の少人数授業がなくなり、小学校では算数の少人数を受けていないことになりました。同じ市内の小学校では、算数の少人数授業を受けている児童がいるのに、公立学校での平等を保っていません。

さらに二学期から家庭の事情から教頭がほぼいませんでした。若い先生たちが相談しようと思っても管理職は、校長しかいませんでした。生活指導関係の問題が起こった時は、校長が一人に対応していました。しかし、問題が起きる時は、連続して起こるため、校長一人では、物理的に対応できないことも起こってしまいました。

そして、六年生の担任が精神的にしんどくなり二学期の途中から病休に入りました。今回は、担任なのでなくすわけにはいきません。六年生のこの時期は、いろいろな部

分で子どもたちへの対応が難しい時期です。だから、メインになる担任を一人決め、それをサポートしていく体制を組むのが良いと思います。人手不足のためその体制も組むことができませんでした。ですから、仮担任を決め、学年で授業交換をしたり、空き時間のある教師や支援の担人が社会や算数などの教科を受け持つことで授業を進めていきました。

また、経験の浅い教師の学級がうまくいかなかったり、多くの教師がその学級に入りたい子どもたちを指導することも続きました。他にも市内の講師不足のため前任校で、うまくいかなかった講師を教育委員会がまた配置するため、児童や保護者、教師間のトラブルも多発しました。

昨年は、このような事以外にもたくさん問題が起こりました。その時、教師不足を改めて実感しました。

私の学校だけでなく、他の学校の知人に聞いても人手不足で困っているようです。講師の先生が配置されても今までに一度も担任したことのない五十代の講師であったり、七十代の講師であったりするようです。

来ていただいた先生には悪いのですが、人数合わせのために配置された講師は、逆に問題をおこし、他の先生たちの仕事を増やしていくことにもなります。(ここで年齢を出しましたが、年齢は関係ありません。)

今年も昨年までとはいきませんが、人手がもつとほしいと思う事は、何度もありました。

「人手不足の対策」

①先生たちで学校の目的を共有する

学校とは、本来、教育活動を通して、学力をつけ、人格の完成を目指すところです。そして、子どもたちも先生もさらには家族地域の人たちが幸せになる事が目的だと思います。

しかし、今の学校の価値は、子どもの本質を見るのではなく、学力テストの点数、タブレットの使用頻度、タブレットを活用した授業の回数などで見られることが多いように感じます。教師も先にあげたことなどで評価育成制度により評価されます。果たしてこんなことでみんなが幸せになれるのでしょうか。今一度、学校の目的を共有する必要があると思います。

②先生の自分学びの場を増やす

今の先生たちは、「タブレットを使った授業をしない。」「〇〇スタンダードをしない。」「このアプリを使いなさい。」など「くをしなさい。」ということが多すぎます。若い先生は、指示された事だけをしていたら良いと考え、自分で問題意識を持たずに指示されたことだけをこなしていきます。逆に指示されなければ、行動しません。

人は、成長することに喜びを感じます。

教師にとって学校は自分が成長する場所ではないかもしれません。指示されて実行するのと自分で考え実行するのでは大きな違いがあります。誰でも、指示されて行う事と、自分で考え実行する事、どちらがやりがいがあり、楽しくできるかと問われれば、間違いなく後者になると思います。だから自分で考え、実行していく場を増やしていかなければなりません。

今の学校の現場は、これもダメ、あれもダメが多すぎます。先生たちがそのような場におかれているので、子どもたちへも同じようにはダメとしがちです。

学校はもつと自由に自分で考えて、行動

する場面を増やしていくべきです。

③コミュニケーションの場を増やす

朝の掃除、ラジオ体操、職員旅行など、みんなでするイベントをたくさん作ってあげたいと思います。ひと昔前の学校はこういう場が多くありました。

こういう場を通して、少しずつでも人間関係が作られます。人間関係を強く太くしていこうと思えば、回数を増やしていかなければなりません。だから、毎日少しでも先生たちが体を動かしたり話したりする場面を作っていくことが大切だと思います。

そして人間関係が構築されていると子どものもので困った時や悩んだ時なども気軽に話せるはずです。

小さい頃からの夢である教師の職に就いたのに一年もしないのに辞めてしまう教師が多いと聞きます。もつと家族のように話せる職場にしていかなければなりません。

このように人手不足の対策は、教師は素晴らしい仕事であること、仕事を通して自分も成長できること、そして大切な仲間がいることなどを実感できるようにすればいいと思います。

個人的働き方改革のすすめ

大阪 吉田雅直

慢性的な教員不足はどこまでも行政の責任において解決すべき問題です。とはいえ、私たちは日々、目の前の子どもたちと向き合い、授業を行い、学力づくりと学級づくりを進めていかなければなりません。そこで、厳しい現状の中にあっても、学級も、自分自身もつぶれることなく、実践を続けていくための、いわば「個人的働き方改革」について考えてみたいと思います。

本当にやりたいことに力を入れる

教育活動の中には、自分が本当にやりたいこと、やる価値があると思うことと、それほど意義を感じられないが「しなければいけないこと」があると思います。日々増え続ける新しい取り組みのすべてに全力を注ぐことは不可能であり、無理をすれば教師も子どもたちも疲れ切ってしまう。そうならないためには、目の前の子どもた

ちの成長にとって本当に必要な取り組みに最優先でエネルギーを使い、それ以外の取り組みには必要最小限の力でいいのではないのでしょうか。もちろん、みんなで決めたことにはみんなを取り組む責任があるので、それは果たすべきだと思えますが、限られた時間とエネルギーを使う優先順位を常に意識することが、オーバーワークを防ぐ第一歩なのではないでしょうか。

自分なりの「こだわり」を持つ

とはいえ、そもそも「やりたいこと」と「しなければいけないこと」の区別が難しいかもしれません。そこで、大切になってくるのが、教育に対して自分なりの「こだわり」を持つということ。例えば「クラスの子どもたちを豊かにつなげたい」というこだわりを持っていれば、「この取り組み

みは子どもたちをつなげるものか、それとも分断するものか」と考えることができるし、「自治的なクラスにしたい」というこだわりを持っていれば、「この取り組みを行うことで子どもたちは自治に向かうのか、それとも管理されてしまうのか」という視点を持つことができます。また、「しなければいけない」取り組みだと感じていたものであっても、発想や取り組み方を少し変えることで、自分のこだわりを実現するものとして位置づけ、利用するというのもできるようになってきます。

このように、自分なりのこだわりを持ち続けることで、何に力を入れるべきか、どのように取り組んでいけばいいか、ということが見えてくるようになります。視界が開け、気持ち楽になります。それは、教育における不易と流行を見分けることにもつながります。政財界の思惑による一時的な流行に振り回され、忙殺されることなく、いつの世も変わらない教育の本質にしっかりと根差した教育を地道に積み上げていくことこそが、真の「働き方改革」なのではないのでしょうか。

「こだわりを捨てる」

ここで矛盾することを言うようですが、自分の「こだわり」にこだわり過ぎると、子どもたちが見えなくなり、何のためにこだわっているのかという本質を見失ってしまうことがあります。私も、「たくさん書かせること」や「学級通信を毎日発行すること」にこだわってしまい、一部の子どもたちや自分自身を追いつめてしまっていた時期がありました。こだわりは「何をするか」という「形」ではなく、「何のためにするか」というより深い本質的なレベルで持つべきなのです。自分が長年自信を持ってやってきた実践ほど、「いま目の前の子どもたちに合っているのか」「本当の目的は何か」「それはいまのやり方で達成することができるのか」「子どもたちの成長と幸せにつながっているのか」ということを考え続けなければいけないのではないのでしょうか。そして、いまは必要ない、あるいはマイナスになっていると思われるときは、潔くこだわりを捨てるということも、時には必要だと思います。教育にこだわりは必要で

が、こだわり過ぎて自分や子どもたちを追いつめないようにしたいものです。

やめる勇氣を持つ

教育活動とは、子どもたちの成長や人格形成にとつて「いいこと」「必要なこと」だと思われて取り組まれるものなので、「これもいい」「あれも必要」とどんどん膨らんでいき、気がつくとも膨大なイベントの海で教師も子どもたちもおぼれそうになっていきます。教師は本当に自分がやりたいことができず、子どもたちもひとつひとつの取り組みを流れ作業的にこなしていくのが精一杯で、それをするだけで自分たちにどんな力がついたのか振り返る余裕ありません。「毎年やっているから」というだけで、教育的意義や目的が吟味されなまま、なんとなく毎年行われている行事もあります。以前の勤務校では、行事の精選のひとつとして運動会の各学年の団体演技(ダンス)をなくしました。運動会の花であり保護者も楽しみにしていると反対の声もあつたのですが、保護者を楽しませるためだけに膨大な時間がダンスの準備や練習に費やされ

ていて、負担感が非常に大きいという意見が多く、思い切つてなくなりました。その結果、個走やリレー、団体競技の練習にしっかりと時間をとることができるようになり、レベルの高い、ひきしまった運動会にすることができました。また、それまで連日のダンスの練習で遅れがちになっていた授業にも落ち着いて取り組むことができるようになり、学級も落ち着いて、保護者からのクレームもほとんどありませんでした。

これはひとつの例にすぎませんが、「これをなくするのはちよつと…」という固定観念にとらわれず、「本当に必要なのか」「何のために、誰のためにあるのか」「もっと負担の少ない方法はないか」という自由な発想で、見直してみたいかがでしょうか。個人的に提案するのは勇氣があるので、まずは職員室で話題にし、仲間を見つけて一緒に提案するのがおすすすめです。新しいことをはじめると、なくす方がエネルギーがいるかも知れませんが、小さな変化もコツコツと積み上げていけば大きな変化につながります。まずは、自分にできる個人的な働き方改革から、はじめてみませんか。

担任不足、教員不足の現状とその対策、学校現場がすべきこと

鈴木基久（静岡県）

数年前から教員の働き方改革がメディアでも取り上げられることが多くなってきた。私自身も働き方改革に関心があり、学校業務改善アドバイザーの妹尾昌俊さんの書籍を何冊も読んだり、講演を聞いたりしてきた。2年前の夏の校内研修では、働き方改革についてワークショップ形式で課題を出し合うことを行った。

教員採用試験の倍率が低下している、教員志望者が減少しているというニュースは何度も聞いていたが、そのことが今年度になって突然、我が身にも降りかかってきた。どういうことかというところ、担任が見つからないため子どもの数が減っていないのに、学級減になったということだ。浜松市では「はままつ式30人学級」を小学校3年生までで実施している。

対象学年の学級平均人数が30人を超えると、学級を増やすことができる制度だ。私が担当している2年生は、昨年度まで4学級で26人だったのに、今年度は3学級で35人になってしまった。近隣の小学校の様子を聞いても、多くの学校で同じことが起こっていて、どこでも学級担任をしてくれるフルタイム勤務の人が見つからない状況だと分かった。

学級の児童数が30人未満から35人になると聞いても、大した違いではないと思う人もいるかもしれないが、実際は全く違う。私は昨年度も2年生を担当していたので、その違いを日々実感している。例えば、国語の作文指導では、同じ授業時間では、昨年度より指導が行き届いていかない。家庭学習についても、昨

年度取り組んだことが1か月遅れでようやく始められたということも多かった。学校体制で多層指導モデルⅢのアセスメントに取り組んでいるが、学級平均を比較すると、今年度3学級になってしまった1・2年生の平均点の伸びが小さいことも分かってきた。担任も子どもたちも一生懸命取り組んではいるが、よりよい学習環境を準備できていないことが残念でならない。

こんな悪循環を断つにはどうしたらよいのだろうか。昨年の8月には「教師を取り巻く環境整備について緊急的に取り組むべき施策」がまとめられ、文部科学大臣がメッセージを公表した。このメッセージにあるように、国や県、市町村や教育委員会がするべき小手先でない対策は、どんどんやっていただきたいと思う。一方で学校現場は自分たちができることをもつとするべきだというのが、私の考えである。何をすべきなのかについて、例を挙げて説明する。

教員不足に悩む学校は、教育委員会に登録されている教員希望者を紹介してもらおうとするが、最近では紹介できる登録者が足りず、結局自分たちで探すしかない状況になる。そこで、何とか担任をやってくれそうなAさんを見つけられたとしよう。そのとき、校長が次のように言えるかが重要だと私は考えている。

「うちの学校は、本当に働きやすい学校です。ニュースで学校はブラックだと報道されていますけど、うちの学校はそんなことはありません。安心して働いてもらえる学校だと自信をもって言えます。」

今の学校は、先生方の献身的な努力によって辛うじて成り立っているのではないだろうか。この献身的なところがよいところでもあり、ブラックを生み出す原因にもなっていると思う。また学校での同調圧力も業務のスリム化を阻む要素になっている。効果が上がっているかを検討せずにはやめられずにいることが多くあ

るからだ。

十二月の学力研の冬のフォーラムで久保先生が「目の前にいる子どもに合った教育をする。子どもに合わせなかったらこけるに決まっている。クラスによって子どもが違うから学級担任がいる。」と言っていたように、それぞれの教員の裁量権の確保も働き方改革には大事な視点だと思う。

どの学校でも来年度に向けて教育課程の会議が行われていると思う。学校をよりよくするためには建設的な話し合いが何より大切で、私自身は学校経営に参画する意識でこれまで意見を述べてきた。最終的に決裁するのは校長なので、働く職員の意見を汲み取った職場環境づくりと学校経営をお願いしたいと思っている。

正月にNHKスペシャル「2024年 私たちの選択」を見た。社会全体の働き方改革について、大きな視点で考える必要を感じたので紹介したい。番組では30年後の2054年に日本がどのような国になって

いるかをシュミレーションし、6つの未来の形を示した。興味深かったのは、5つの分岐点があり、どちらの道に進むかで未来の日本が変わるところだった。例えば最初の分岐点は「2028年に賃金上昇できるか」だ。そのために必要なのは、テレワーク導入企業E、男性育休取得率F、運動習慣G、労働時間減少。このような大きな視点から考えると、運送2024年問題や男性育休についての取り組みに納得できた。また番組の中で残業時間を減らすことに取り組む機械メーカーが出てきたが、利益を出さなければならぬ中の民間企業の労働時間短縮は本当に難しいそうだった。学校は利益を出すことを求められていないのだから、その点ではもともと働き方改革を進められるはずだ。すべての業種で人手不足となる中で、今後も教員を確保するには、社会の動向にも目を向けて、学校の働き方改革を一層進める必要を強く感じた。

先生が足りない

大阪 根無 信行

一、文科省も調査済み

一昨年（2019年）のNHKの調査で、全国で教員不足が2800人、講師の先生で補っても、年度途中で欠員が出て、秋の時点で1000人を超える未配置ということが報道されました。（今年度も文科省が調査を始めたことが報道されています）。今年も私たちの働いている市の子ども園、小学校ほぼ全ての職場で欠員があり、多い所は複数人の欠員状態です。そんな学校現場では、同じ学年のクラスで、合同で授業を組んだり、教務主任や府の事業加配が担任代行で業務を行ったりしてしのいでいます。

国が、コロナ禍をきっかけにして、35人以下が学級編成の学年を、引き上げる方向に動いてくれました。ところが、その分、大阪府は、それまで府単位で行っていた2年生の独自の加配から手を引いてしまった

のです。そのため、残念ながら2年間、学級人数は改善されなまま、現場の先生はふんばってきました。

子どもの数や仕事の量は多いのに、配置がない、欠員が分かっているのに先生が足りない、来てくれる先生がいない、それが悩みなのです。

二、学校の様子

大阪府の学校での、欠員の状況の現状を言いますと、4月の時点で、講師の先生が補ってくださるので、足りないスタートはほぼありません。しかし、実際には、クラスの数や学級減になる可能性がある（例えば一クラスが18人の2クラスで36人の場合、転出等で学級人数が減った場合を考慮して、5月1日までは、1人少ない状態で学校は運営されます。（5月1日に定

員数に達していたことが確定したら、1人赴任されます。）これが、一見、先生が足りているように見えながら実は足りていないという1ヶ月間、年度初めが不安定な原因です。

さらに、私の勤務する市では、ここ数年、年度途中に、2〜3人の先生が休みに入られる状況が続いています。ところが、その先生たちの代わりに赴任される先生はいないまま、年度末を迎える、というのが、市内どの学校でも、「当たり前」になっているという状態なのです。この、4月のスタート時ではなく、年度途中、というのが、代わりに来てくださる先生不足の原因となっています。

急なお休みを必要とする場合もあります。学校の先生の仕事は、「在宅」ではできません。もともと先生が不足している状態で、本人が元気で、『リモートワーク』で対応できるものではないので、お子さんやご家族の急な病気やケガで休まれる方、インフルエンザの流行期などは、もっと先生がい

なくなる時期があります。

学校のできることは、「入れる先生が入る」ということだけです。加配の先生、専科の先生の空き時間、各担任も、専科の先生との兼ね合いで空き時間一覧表を作って、職員室に貼ってあります。(4年生の担任などは週1コマ半時間だけの過密さですが)それを見て教務主任が声をかけて回るという形です。それでも年度途中から講師として赴任する形で講師を登録されている方がほとんど無いため、退職された先生に頼っているのが現状です。

先生が足りない状況を埋められない現状は、教師の仕事の多忙化があると思います。

三、今と昔

週休二日制が学校にも取り入れられましたが、授業時数は減ったわけではありません。その分、担任一人ひとりの一日での持ち時間が結果として増え、授業の準備などに充てる放課後や空き時間が無くなっています。また、放課後の研修や会議も増えて

います。今年はコロナ禍が明けたため、運動会の演目が通常と同じに戻ったのですが、なぜか練習時間が足りず、慌ただしく感じていました。コロナ前に戻っただけなのに、どうしてだろう、と、初めは戸惑うばかりでした。が、コロナ禍中に、放課後六時間目が終わってすぐの研修や会議が、直接児童と接しない時間にできる業務として、以前より「増えて」しまったため、かつて普通に行っていた六時間目後の10分程度ですら、無かったことが原因だと分かりました。その少しのゆとりで、子どもたちと残って練習をしたり、学習が苦手な児童の補習の時間としていたりしたのです。

コロナ禍で先生が会議を持ちやすくなったとして、小中一貫を進める学校も増えてきているのではないのでしょうか。本校も、徒歩で歩いて30分以上かかる中学校と、施設分離型の小中一貫校をスタートし、打ち合わせの会議のために、三小学校一中学校で、頻繁に会場を変えて、月に一度は必ず会議を持つことになり3年目に入ります。

その日に放課後はもちろんありません。(6時間目後子どもをすぐ下校させ、20分後には会場で会議を行っているという慌ただしさです。)子どもをゆっくり下校させたり、下校後の安全を見守ってあげたりする職員の数も足りません。会議後は戻って勤務時間外に仕事をするか、持ち帰り、または土日出勤をされる方もいます。そういった中、先生たちがそれぞれの仕事を抱え、補欠に入る、といった状況が生めなくなっているのです。

専科のいない教科担任制も大変です。小学校は中学校と違い、学年間で担任が交代して教科を教えるタイプの教科担任生なので、専門性の希望は残念ですが叶えられません。また、交代なので、同じ時数で交換するしかなく、例えば6年生なら体育と外国語、理科と社会などの交換になります。ただ、理科は実験に2時間続きで使いたいときもありますし、体育は天候で運動場が使えないときもあり、時間割を組み替えるだけでも、毎週相談に時間を使うことにな

ります。専科でないため、空き時間ができるわけではないです。それなら、教材研究に充てられたらなあ、と思う時間が流れません。

こういった先生の多忙化が、年度途中で休みに入られる先生を生み、また以前のようにゆつくり話のできる同僚や、手を差し伸べてくださる先輩方にもその余裕がなくなっているので、気がついた頃には休みに入られた、となっているのです。これは昔にはなかったかもしれない事態です。

補欠対応が起きたときの、親御さんの受け止めかたをふと考えてみました。

昔、私（40代）が子どもの頃、産育休の代替の先生が来られることはよくありました。その頃は、完全に新しい方が赴任される形でした。だから私たちと同世代の、今親になられた方は、担任が変わっただけ、代わりが来られてよかったね、という認識でおられるのですが、現状は、違いますよね。

新規赴任が無いため、代替は校内から配

置換えの形で行われているだけです。そのため、何らかの仕事を残った職員でそれぞれが負担することで何とか成り立っている状態です。

残念ながら、この状況は、先生たちが120%の力を出してふんばっているだけです。このままでは、先生方の体力と気力もつか、ゆつくり子どもと向き合う時間がとれず、教育の質の低下になってはいかないか、が心配です。

四、この状況を変えるために

人が足りない、を経験した管理者の先生は、毎年、何か事業が紐付けられている加配を、配置してもらえようように手を挙げられます。その加配の方を定数プラス1とカウントして、もし欠員が出た時もそこで対応されようとするのですが、いざ欠員補助に移っても、もともと抱えておられた事業は残ります。

会議や出張や、公開授業など、外に発信するものをやめたり、なくせたりするはず

はなく、仕事は増えてしまったのに人は減る、という悪循環にもなっている気がします。

先生をふやすこと、それは管理職の先生をふくめた教職員全員一致の願い、親御さんと、豊かな教育を受けたい子どもたちの願いでもあります。

先生が増えて、一人ひとりの子どもたちとゆつくり向き合う時間が増えれば、子どもたちに丁寧な教育、長時間労働の解消につながっていくことでしょう。

そして、どんな教育活動が子どもたちの力を伸ばす、学校しかできない取り組みなのかをもう一度話し合って整理し、検討することだと思っています。

学力研でいろいろな先生、学校の取り組みを学ばせてもらい、何が子どもにとって大事な取り組みなのか、考えられるようにしていきたいと思えます。

教職員定数の抜本的改善・待遇改善をこそ

図書 啓展 ずしょ ひろのぶ 大阪みなみ学力研

●産休代替教員からの出発

「ごめんね。ごめんね。」

気がつくと、私はそう叫びながら泣いていた。産休講師をしながらも採用試験に合格するために、毎晩、夜中の一時、二時まで“受験勉強”をしていた私だった。本当は今、担任している子どもたちのことだけを考えていたかった。その子たちのためだけに時間を使いたかった。しかし、なんとかして合格しなかったのだ。採用試験不合格、力を入れたつもりの卒業論文もうまくいかず、おまけに失恋。さらには友人との仲もうまくいけなくなり、深い悲しみと苦しみのなかで大学を卒業した私にとって、残る道は次の採用試験になんとしても合格することだけだった。

飲み会の帰り、一人になって、今担任している子どもたちの一人ひとりの顔が頭に浮かんできた。こんな頼りない自分にもつい

てきてくれる子どもたち。君たちに全力を尽くしたいけど、合格もしたい。本当に申しわけない。本当にごめんさい。そんな思いがあふれてきていた。

（それ行け！学力づくりだ青年教師）

若い頃に「落ち研」仲間と出版した本の「あとがき」にこう書きました。私の教員生活の出発は産休代替教員でした。この当時、教員は人気のある仕事の一つであり、教員採用試験の倍率も高くなっていました。教員に対する世間の「リスクペクト」も大きな時代です。

しかし、残念なことに今は教職に対する風当たりもきつくなり、教員をめざす人たちも減ってきています。

●「教育に穴があく」

大阪市では11月1日時点で、何と小学校53人、中学校9人の欠員がありました。臨時教員がざっと60人以上待ちです。この

中には産育休の代替教員の欠員が含まれており、小学校20人、中学校3人の欠員があるのです。

各学校では一人一人の授業のコマ数を増やして対応したり、校長先生や教頭先生が何コマも授業をもつて対応したり、という実態もあります。年度途中に教職員が不足したまま日々の学校運営が行われています。明らかに臨時教職員が不足し「教育に穴があく」状況が生まれています。これは、大阪市だけの問題だけではなく全国的な問題です。

一方で、正規教職員の代わりに勤務している「定数内教職員」は、大阪市で5月1日時点で小学校で274人、中学校で237人もあります。

つまり、「正規教職員」の採用数を減らし、臨時教員を定数内教員として任用することによって、年度途中に増える産育休や病休等の代替教員が決定的に不足することが続いているのです。

●臨時教職員の定数内化のきっかけとは

このように臨時教職員を定数化したきっかけは、2004年の義務教育費国庫負担法の改正で、公立小中学校の教職員給与の

国庫負担率を2分の1から3分の1に減らされ、負担金の範囲内での各自自治体の裁量の拡大した(総額裁量制)ことにあります。各自自治体は、限られた予算で人件費と定数の抑制を促され、臨時教職員の定数内化(定数くずし)が進んだのです。

日本の公教育はこのような臨時教職員等の組み込みで成り立ってきているのです。しかし、今、臨時教職員のなり手が本当に少なくなり現場の欠員が生まれています。

●教職希望者減少の背景

教員の長時間過密労働による健康破壊や学校現場の大変さ、給特法による残業代も支給されない「定額働かせ放題」の問題などが広く知られるようになりました。

教員への世間の風当たりもきつくなり、教職を希望する人が少なくなるなど、教職員の未配置問題はいくつもの要因が重なって生まれています。

特に大阪では、橋下府知事・市長時代以降、教職員の削減・給与の引き下げや諸権利剥奪など露骨な教職員・公務員攻撃、学校統廃合の強行など「教育壊し」が行われてきました。大阪から教員が逃げたと言われます。粘り強く幅広い共同の闘いで押し

返ってきていますが、教職員の待遇改善はまだまだ課題です。

●対策は何か

まず、何といたっても「教職員定数の抜本的改善」が必要です。

ほぼ毎日6時間授業で、小学校の担任には空き時間がほとんどなく、授業準備や成績処理などは子どもたちの下校後となります。

しかし、放課後は会議や研修、打ち合わせがあり、勤務時間内にそれらを終えることは難しくなっています。勤務時間内に授業準備やすべての業務が完了できる時間の確保できる環境づくりを強く求めたいです。

義務教育標準法(1958年制定)では8時間労働のための授業は「1日4コマ」とされています。しかし、教育にお金をかけない教育政策と膨らみ続ける学習指導要領のため、教員の持ち時間は増やされ続けてきました。特に学校五日制の導入後は持ち時間がいっそう過密になりました。

教員の週あたりの担当授業時数の上限の設定が不可欠です。小学校20時間まで、中学校18時間、高校15時間が目安にして計画的に教職員定数を改善することです。

「定数くずし」による臨時教職員の拡大

をやめ、「総額裁量性制」を廃止し、都道府県や政令市が正規教員の配置を原則とするよう国として予算措置をする、あるいは自治体独自策を講じるべきではないでしょうか。臨時教職員の正採用化を進めると共に、非常勤講師確保・プールも促進すれば、「教育に穴があく」現在の異常な事態は改善されていきます。

必要な職員配置も各自自治体独自でもっと進めることが可能でしょう。スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーなど、いじめの増加や過去最多になった不登校などに対応するための専門職員の拡充や、ICT支援員、部活動支援員など学校在駐も含めた配置・拡充が求められます。

私の職場には、スクールサポートスタッフと言ってプリントの印刷や配布物の仕分け、電話・来客対応、清掃など担当してくれる職員が配置され、とても助かっています。全校に配置されるといいと思います。

さらに、給特法の改正など待遇の改善、少人数学級による教職員増も重要。もっと教育に予算を！の声を大きくしていきましょう。

平教師にもできる、予防的な対策

春日井学力研 堀井 克也

これまでの経験をふり返って

思い返してみますと、私の教員人生のスタートは、常勤講師として、精神疾患で退職された先生の代わりに十一月から六年生の担任になったことでした。本来なら最高学年として学校全体を引っ張っていくことを期待されるはずなのに、学校のお荷物のように扱われ、「早く卒業してほしい」と陰口を叩かれるような学年でした。同じ六年担任のお二人とは緊密に連携できましたが、その他の学年の先生の中には、私のクラスの子どもが問題を起こすと「ちゃんと指導してください！」と厳しく言ってくる方もいました。(これまでの指導も含めて学校全体の責任なんじゃないかなあ…)と、素朴に疑問に感じたことを覚えています。

その後は幸運なことに、自分の職場では病気で長期間休む先生にはほとんど出会っていませんが、少し前に、大学を

卒業したての常勤講師さんが、体を悪くしたのをきっかけにして精神的に不調に陥り、離職したことがありました。とてもまじめで努力家な方だったので、近い将来採用試験に受かって正規の教員になるだろうと思っていただけに、とてもショックでした。

今にして思うと、徐々に表情が暗くなって、元気が無くなっていたように思うのですが、その時の私は自分自身にあまり余裕がなく、支えてあげられませんでした…。

二〇二二年度に精神疾患で退職した教員が六五三九人に上ったそうですが、こうして数字で表現してしまうと、一人ひとりの先生方の人格は捨象されてしまつて、その苦しみ悩みをリアルに感じることを妨げてしまうことも、あるような気がします。本来であれば、一人でもそんな方が出てこないようにしなければならぬはず。

根本的な対策に関しては、我々教員に

できることは少ないと思います。国や教育委員会に動いてもらう他ありません。

では現場の教師として何ができるのか。今現在自分自身がしていることは何かについて、整理してお伝えしたいと思います。

責任はみんなで負うべきものである

現在、私は学年主任でもない平教員です。中堅としてミドルリーダー的な役割を期待されていますが、指導的な立場にあるわけではありません。では何ができるのか。

まず、何か問題が生じた時に、担任一人に責任を負わせないようにすること、教員一人ひとりのマインドセットが変わっていくように仕向けることを意識しています。

そもそも学校で起きる様々な問題の背景はあまりに複雑で、簡単に原因を特定できるようなものではありません。それを担任の力量や指導の仕方一つに矮小化して責任を負わせるのは、間違っているはず(力量向上や指導技術の習得は、また別の機会に明るく前向きに行えば良いのです)。このような内容を、職員室での何気ない会話の中や、自分が主宰している自主研の場において意識して伝えるようにしています。ク

ラスの子どもたちにも、何か問題が起きた時に「誰の責任か」を論じている暇があるのなら「自分に何ができるか」を考えなさい、と伝えていきます。それと同じことを、教員間でもできればよいと考えています。

「顔の見える関係」を築く

次に意識しているのが、できるだけ職員室で仕事をする事です。

実は、以前はよく教室にこもって仕事をしていました。その方が仕事の効率が良かったからです。しかし、それでは職員室で起きている出来事に気付けません。先生方の顔も見られません。先述の講師さんとも一日の中で一度も会話を交わさないような日がたくさんありました。だから、徐々に起きていた変化にも気付けませんでした。働き方改革が強力に推し進められている最中ですから、業務の効率化は大切です。しかし、そのせいで「無駄を省く」意識が強く働きすぎてしまって、職員室でのたわいもない会話やちょっとした情報交換が無くなってしまったら、困っている教員が孤立する危険性を高めてしまいます。

これもクラスの子どもたちによく伝えて

いることなのですが、集団をより良いものにしていくためには、集団を構成するメンバーが互いに「顔の見える関係」になっていくことが大切です。短時間でいいので、何度も向かい合って、言葉を交わし合うことで、徐々に「相手も自分と同じように感情をもつ人間であること」を本当に理解することができるようになっていきます。

追い詰められて精神疾患になってしまう前に、誰かにヘルプサインを出せることが重要だと思うのですが、そのヘルプサインを出せるか否かの分かれ目がこうした関係を築けているかどうか：なのではないかという気がしています。ですから、朝はできるだけだけ一人ひとりに顔を見て挨拶をしますし、帰りも顔を見て挨拶をしてから帰るようになっています。職員室から教室へ向かう道すがら、色んな先生に何か話題を見つけて声を掛けるようにもしています。遠回りなようで、とても大切なことだと思います。まず誰よりも自分自身が安定していること。もう一つ意識しているのが、自分自身が心身ともに健康であり、多少の余裕がある状況にいられるように努める、ということ

です。特にここ数年で、睡眠と運動に対する意識がとて高くなりました。仕事の質を多少下げても七時間は睡眠し、毎日欠かさず運動(この冬は縄跳びを続けていて、初めて後ろ二重跳びが二回跳べるようになりました)をしています。仕事や読書の合間に少し運動すると頭がすっきりして集中力が高まることも分かっていたので、意識して運動を取り入れています。

私が余裕無くせかせかと仕事に追われていたら、周りの先生方にマイナスの影響を及ぼすでしょうし、そんな私に困りごとを相談しようなどとは思わないはず。心身ともに健康で、楽しんで仕事をする：そのためには努力も必要なのです。

予防にコストをかける

これまで私が述べてきたのは、全て予防的な手立てです。現状、誰かが長期間休んだら代わりの先生は来ません。だからこそ、今いる人たちがそれぞれの能力を十分に発揮して、仕事に励めるように、予防にコストをかけるべきなのです。そのコストを自分も負担することの意義をよく理解して、安定した学校運営に貢献していきたいです。

教員不足の現状とその対策

「そんなものではありません！」

加印いろえんぴつ 岸本 ひとみ

兵庫県下では200名以上の欠員があると報道されています。(読売新聞調べでは269人 1月22日付)学校数は小中合わせて、1125校だから、平均すると4つの学校で1人は、教員が足りていないという現状になります。兵庫県の場合、複式の小規模校から、過大規模の学校までいろいろあるので、教員不足とはいっても、それぞれの学校で事情は様々でしょう。とにかく、先生がいなのが頭痛のタネというのが、各教育委員会の共通の悩みようです。

2学期からの担任はいけれど

9月から1年生担任になりました。子どもたちはかわいくて、毎日楽しんで過ごせてはいますが、1学期に私が担当していた3年生から6年生までの算数の授業は、今はすべて担任が担っています。特に、支援学級の子どもたちを入れると40人になる学年は、算数も36人も大人数のため、担

任の負担が大きくなっています。36人分のノートやドリル、プリントの丸つけだけでも、かなりの時間を費やしていました。その上、算数の授業の準備は必要ないと思っていたのに、それもしなければならなくなったのですから、かなりの負担増大です。また、ある学年は、低学年時の基本的な計算ができておらず、毎日5分間のさかのぼり指導を進めながら、何とか授業もこなしていた状態だったのです。1年契約の臨時講師の私が心配することではないかもしれませんが、そのふたつのクラスの担任の負担はかなりなものになっていると思います。

全職員でカバーするとはいうものの

単学級の学校なので、ベテランの専科の先生が、理科と図工の他に、ひとつの学年の社会科を担当してくれました。また、ある学年の算数は教頭が入っています。そし

て、1年生付きの指導補助の先生には、5年生の算数の宿題の丸つけと提出確認をしてもらうことで、何とか半年過ごしてきました。

みんな、それぞれがいっぱいいっぱい状態なので、余裕のない様子です。2学期末の期末事務の際には、3教科6学年の評価をしなければならぬ、ベテランの専科の先生は、

「次はどのクラスやっつけたって、パソコンの画面をにらんでいて、頭痛がしたわ。」

と、苦笑していました。

教頭も1学期は、算数のT2の立場から、いきなりT1になったわけですから、教材研究に追われて、教頭事務がなかなかできずに、困っています。

校務分掌も2人分

算数担当、統計教育、安全教育、福祉教育、給食会計、給食指導、校外学習。これが、2学期以降の私の校務分掌となりました。たまたま、同じ町内で勤務年数が長い者が担当しているので、2人分でも回して

いくことができているのですが、初めての人だったら、これはなかなか難しいことだったのではないかと思います。

それでも、先日、ゲストティーチャーを依頼するのを忘れていて、大慌てで手配を済ませたこともありました。

担任はそろっているのですかも

外から見ると、1年生から6年生、支援学級2クラスの担任はそろっています。担任不在のクラスがある場合とは違って、他のクラスや学年の子どももいっしょに指導したり、自分のクラスを見ながら、となりのクラスの生徒指導に追われたりすることはないので、安定していると言われればそうなのかもしれません。

保護者も、1学期末から9月にかけては、ハラハラしながら見ておられたようですが、担任代行で私が入ることになり、1カ月もたつと落ち着いてこられました。届くお便りも、困りごと相談や、足りないものの確認程度になってきて、ごくごくふつうの1年生のクラスになってきています。

底上げの視点だけは

あわただしい日々の中ですが、底上げの視点だけは、全職員が持てるように、働きかけはしています。特に、研究推進担当の教員が、体力テストの結果分析から、投擲の力が弱いことや、遊びの経験が少ないことを指摘して、場の設定を検討してくれました。

異学年交流として、遊びの会を企画して、高学年と1年生で鬼ごっこを楽しみました。4年生にはこちらから逆提案をして、大縄練習をいっしょにしたり、3年生には「だるまさんが転んだ」を提案したりしています。

体づくりだけでなく、基礎的な計算力が脆弱だという点からも、朝の計算タイムの設定もしてくれました。算教担当として、スタート時はどんな計算をしたらいいのかを提案して、各クラスを見て回って、やり方を教えたりしていました。1年生の担任に入ってしまうと、内容の提案はできなくても、指導法まではなかなか確認ができなくなってしまうのが、残念なところですね。

加配教員を常に置いておく

校長は「若い先生や、経験年数の少ない先生が増えてくるから、学級担任制ではうまくいかないことが増えていくと思います。学力保障のためにも、他の方法を考えないと……。」と盛んに訴えています。それは、逆だと、今回の担任代行をやってみて思いました。

学級担任制の良さは、細やかに、ひとりひとりの子どもに目が届き、個性に応じて指導内容にバリエーションがつけられる点にあるのに、教科担任制ではそうはいかないでしょう。要は、今年の私のように、代替として派遣できる教員を確保しておけばいいのです。

教育委員会単位で、担任が欠員になったときに、代行できるだけの定員を確保しておくことができれば、何も悩むこともないはずです。いわゆるプール教員というやつです。これだけ教員不足がニュースになる世の中ですから、先駆けでプール定数を設ける都道府県が出たら、世の中は大喝采を送ること請け合いだと思うのです。あとは、教育委員長や首長次第というところですね。

「意欲格差」に負けない！公立小学校へ

事務局長 岡本 美穂

■「反対の立場を考えて意見文を書く」

(東京書籍)

単元の計画(全6時間)

- 1 これまでの学習を振り返って、反対意見を考えて意見文を書くために学習の見直しを立てる。
- 2 「ペットにするなら猫か犬か」という話題に対して、自分の意見とその理由、反対意見とその対応を考える。
- 3 「学校は制服か私服か」という話題に対して、自分の意見と予想される反対意見を確かめて、グループで意見を交流する。
- 4 「学校は制服か私服か」という話題に対して説得力のある文章になるように構成を考える。
- 5 構成メモを基に意見文を書いて、友達と読み合い感想を伝え合う。
- 6 説得力を持たせるために、どんなことに気をつけて書いたかを振り返る。

板書の基本

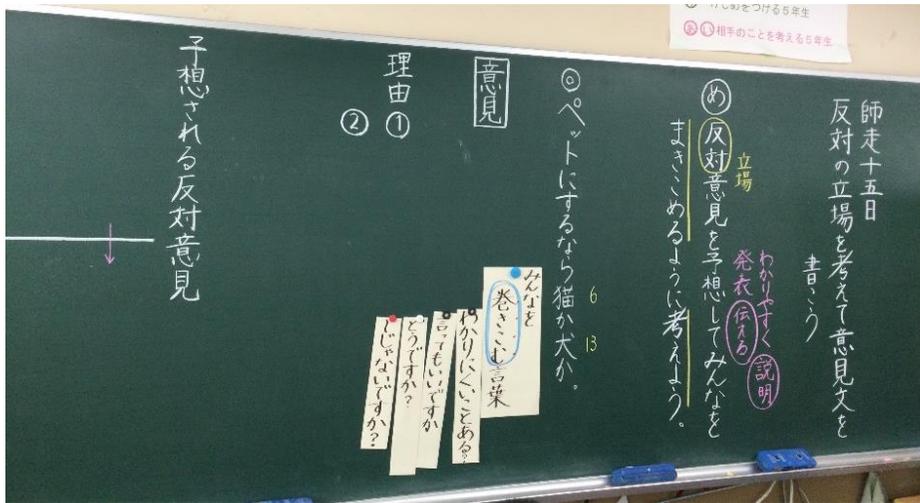
本単元では、意見文を書くことに取り組みます。その際、自分の意見とその理由だけでなく、反対意見について、文章全体の構成や展開を考え、筋道の通った文章を書くことができることをねらっています。説得力のある意見文を書くためには、ただ理由を挙げれば良いのではなく、反対の立場の人を説得できるような内容にする必要があることを子どもたちとも確認しました。そのために、自分の意見に対する反対意見を友だちと相談し合いながら予想し、それぞれの意見への対応を考えながら、文章の推敲に取り組みようにします。

この学習を通して、特別活動や、総合的な学習の時間などで自分の考えを述べる場面や、日常生活のさまざまな場面において、自分の意見を明確にできるようになり、反論や、反対意見を考えて意見を述べる力を

育てていきたいと考えています。そこで、より身近な話題として「ペットにするなら猫か犬か」「学校は制服か私服か」「将来住むなら都会か田舎か」・・・などといったテーマでまずは交流していきます。そして、自分が考えた意見に対してはどのような反対が想定されるか、また、その反対意見に対してどのように説明し納得してもらおうのが良いのかを考えました。途中、グループを作って、グループの中で他にどんな反対意見が考えられるか、また反対意見にどのように説明していけば良いかを交流し、自分の考えをより自信を持って伝えられるようにしていきます。

書くためには情報を集めることがまずは大切です。そこで板書では、子どもたちの意見を上下に分類しながら書いていきました。すると、子どもたちそれぞれが考える意見に対して、反対の意見があることも見えてきました。そこで、反対の立場の人に説明して理解してもらおうためには、どのように意見文を作ればいいのか、考えることができるきっかけづくりの「板書」をめざしていきます。

板書のコツ1



今回のめあては「反対意見を予想してみんなをまきこめるように考えよう」です。今まで、根拠を持って意見を伝え合う活動は行っていますが、そこから「反対の立場を考える」⇒「反対の立場を考えて意見文を書く」と発展しています。まず、自分の立場をはっきりするために教科書を読んだ後に、「ペットにするなら猫か犬か」という課題で考えることにしました。考えるのが苦手な子どもたちにとって話し合いやすいテーマにしました。ここから、「反対意見を予想する」活動につなげていくためです。

まず、板書しながら自分の意見をノートに書くように伝えます。意見をノートに書く際には理由を必ず2個は書くこと、そしてそれが終わったら予想される反対意見を考える時間をとりました。ノートを上下2段にして、上に意見、下には予想される反対意見をメモできるようにしました。そして、書きおわった子どもたちから交流し、さらに自分の考え、意見をノートを見ながら深め合いました。

全員ができたところで、一度「めあて」



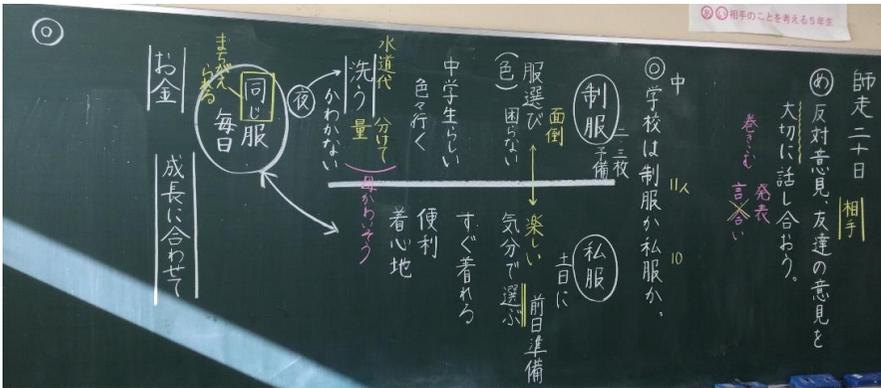
にもどりました。「みんなをまきこむ」ためにどうすべきかを話し合うなかで、「言葉」に注目することが大事という意見が出てきたので、具体的な言葉を短冊にして板書にはりました。その後、交流しました。

今回は、振り返りとして短い時間でした
が「意見文を書く」ようにしました。自分
の意見を根拠を持って書くこと、そして反
対意見を具体的に書くように伝えました。
ここでは、出てきた反対意見が板書してあ
るのでそれをもとに書く姿が見られました。
◎の「犬と猫のそれぞれの意見」というの
は、ある児童の今日の授業の題名です。題
名を使えることで今日の意見文の「要約」
の役目にもなっています。

板書のコツ2

前回の振り返りとして「意見文」を何人
か紹介しました。すると、今回のめあては
「反対意見、友だちの意見を大切に話し合
おう」が良いのではという意見が出てきた
のでそれをめあてにしました。意見文を書
くためには、ただ「発表」したり、意見を
「言い合い」するのでは良くないという子
どもたちの意見も板書しています。どうし
ても「反対意見」というと「勝ち負け」に
こだわったり「言い負かす」ような場面に
なってしまうことも考えられます。しかし、
この単元は「書くこと」領域の「意見」の

系統として位置付けられています。だから
こそ、話し合い活動で終わってしまうので
はなく、必ず「書く」活動につなげていく
ことが大事です。



■対比を捉えやすくするため

上下2段に分ける板書

書くことは、子どもたちにとっては根気
のいる作業であり、苦手だと思っている子
どもたちも多いものです。書く意欲を膨ら
ませるためにも、書くネタをたくさん持つ
ておくことが大切です。そのために交流の
時間を2時間設定しました。対比的な意見
を書く板書では、黒板を上下(2段や3段)
に分けて整理することで、内容が視覚的に
比べやすくなります。

このように毎月、

<https://kyoiku.sho.jp/special/137931/>

見やすく理解しやすい「単元別 板書の技
術」京都女子大学附属小学校特命副校長 吉
永幸司監修で特集していただいています。

考える力をつけるための授業の組み立て方⑥
同じパターンの問いを年間通してする効果
 大阪教育サークルはやし 荒井 賢一

四年理科「冬の生き物」の第一時である。

「先生がどんな問題を出すか、予想できますか。」と問いかけると、数人が発表する内に、正解に行きついた。

なぜなら、「春の生き物」「夏の生き物」「秋の生き物」と、同じような問題を常に第一時で問うてきたからです。

四月「春の生き物」の第一時



上記の写真は、四年理科(啓林館)に載っている写真だ。

これは、128頁の「冬の生き物」の単元に載っている。

「春の生き物」を教えるに当たり、最初に、この写真を見せる所から授業を始

めた。

「何が見えますか。」

と発問し、列指名で言わせていった。

山とか木とか雪とか、目に見えるものを言えはいいのですから、難しくはないはず。

次に、季節を予想させ、その理由は挙手指名で発表させ、

「春になると、どうなると思いますか。隣のひとと話し合ってください。」と相談の時間を取ってから、列指名で発表させた。

「自分の意見でも隣の人の意見でも、どちらでもいいです。」

この後、ようやく教科書やノートを開かせ、次の問いの答えを書かせていった。

「冬から春になると、何がどうなるか。」挙手で二つ事例を出させた後、ノートに書く時間を五分間とった。

「五分間で四つ書けたら、四年生レベル合格です。」

ノートは持って来させず、私は机間巡視をし、子どもたちの書き方を見ていった。

五分後に、現段階で何個書けるかを手を挙げさせ、その後、隣のひとと一つ交代で発表させ合う時間をとった後、列指名で発表させていった。

こうしてみると、全員が参加できるような配慮をよくしている。

七月「夏の生き物」の第二時

教科書にある同じ場所の春と夏の写真を比べて、何が変わったかを数人に言わせた後、次の発問で書かせていった。

「春から夏になると、何がどうなるか。」以前は、「冬から春になると、何がどうなるか。」だった。

当然、「秋の生き物」の単元では、「夏から秋になると」となる。そのことをすでに予想していて、つぶやいていた子もいた。

【子どもたちの意見】(一部紹介)

- ① たんぼのたうえがおわる。
- ② あたまがいたくなる。
- ③ 学校のクラーがガンガンになる。
- ④ 海やプールなどのイベントが開く。
- ⑤ 半そでや半ずぼんをきる。
- ⑥ 細めに水をやらないと植物がかれる。
- ⑦ セミがうるさくなる。
- ⑧ 日がしずむのおそい。

- ⑨とけいがじゅうでんしやすくなる。
- ⑩入道雲がでる。
- ⑪山や木や草などが緑になる。
- ⑫植物が大きく成長する。
- ⑬気温や水温が高くなる。
- ⑭熱中しようにたいさくの物がふえる。
- ⑮すいかがおいしくなる。
- ⑯クワガタが成じゅくして交尾する。
- ⑰日ざしがつよくなる。

十一月「秋の生き物」の第二時

【板書】夏から秋になると何がどうなるか。
主語と述語を問うことが大切。
「どうなるか」だけを書くと、書く意見が短くなり、単語に近くなってしまふ。
「何が」を問うことで、人間以外の動物や自然にも意識が向くようになる。

【子どもたちの意見】（一部紹介）

- ①イチヨウが黄色になる。
- ②暗くなるのが早くなる。
- ③おでんがすこしずつにんきになった。
- ④夏にいた虫がすくなくなつた。
- ⑤食よくがふえた。
- ⑥お風呂上りが寒くなる。
- ⑦学校の水とうをちいさくする。
- ⑧ニットやコートなどが着れる。
- ⑨家のゆかがつめくたくなる、とくに朝。

一月「冬の生き物」の第二時

【板書】秋から冬になると何がどうなるか。
ノートに番号を打って簡筆書きさせ、机間巡視をして、全員がノートを開いて、番号を打っているかをまず確認した。

それから、「20人以上の人」といきなり大きな数から聞いた。その後、数を減らして10個以上でノートを打つてくる子が出た。（いつもならテスト返しの後なので、20個以上もいるのである。最終的に、多い子は百個書く場合もある。）

子どもが持つてきたノートを私はサッと見て、「8番、書いて。」と指示して、その意見を板書させていく。

選定基準は、以下の通りである。

- 一 今回の学習に役立ちそうな意見
 - 二 ほかの人が思いつかないような意見
 - 三 その意見から話題を広げられるような意見
- 誰もが書けるような意見は後からノートを持つてくる子のために選ばずにとっておく。学級の人数が二十数人なら全員板書した段階で、板書を読ませて、授業を進めていく。

【子どもたちの意見】（一部紹介）

- ①つららができる。
- ②スノーボードをするようになる。
- ③カイロを使うようになる。
- ④クマが冬みんする。

- ⑤虫をあまり見なくなる。
- ⑥しも焼けになる。
- ⑦かあちゃんが入る時間が長くなる。
- ⑧お風呂に入る時間が長くなる。
- ⑨かんそうはだになる。
- ⑩かぜがひきやすくなる。
- ⑪外でアイスを食べてもとけない。
- ⑫木の葉がなくなる。
- ⑬息が白くなる。
- ⑭さむさ予ぼうで金がへる。

いつもなら出た意見を分類させるが、今回は、まず体験を中心に取り上げ、「同じ人？」と聞いていった。共感を大切にして見たわけである。

このように年間通して、同じパターンの問いを出すことで、子どもたちの気付き方や書く力を高めていく。

【学力研Z o o m例会

2月18日（日）午後2時～3時

毎月一回、Z o o mによる例会を開いています。学力研会員なら参加無料です。

ミーティングID：6930706442
パスワード：6533359

（今回は、森元麻里先生が国語「大造じいさんとがん」（飯）について話されます。）
また、近況の交流もしています。

教材研究①

学力研究常任委員 深沢 英雄

一、教材研究とはなにか

野口氏の定義によれば、『教材研究というのとは、いわば「教師としての研究」である。何年生に向くか、どのくらいまで読みとれるか、どのような抵抗があるか、等々を十分に研究し、「何をこそ、この作品で教えるべきか」という「指導事項」の明確化がこの段階での中心的な仕事になってくる。指導という行為を考えれば、この「教材研究」というのはたいへん重要な段階である。だからこそ、ここには三割の力は注ぐ必要があると考えるわけである。』といわれています。

二、教科書を音読する

教科書の教材を授業化すると決まったら、まず、教科書の当該箇所を読むことは、みなさんされると思います。素材研究に入る入口です。

素材研究が一定終わった段階で、もう一

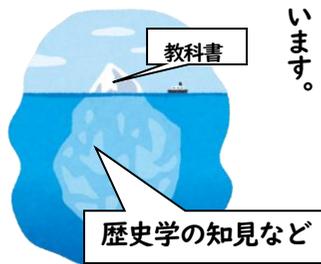
度教科書を読んでもみます。できれば何度も音読します。黙読もします。そうすると、素材研究の前に読んだ教科書の文章が違ったように感じるようになります。一回目はただすらすらと間違わずに読んでいるだけでした。ただ教科書の文を読んでいるだけです。

素材研究をして、色々な知識や視点が入った段階では、音読をしても、途中で止まってしまいます。「これは、この事についての内容を書いているな。あれっ、違うぞ。そうか!」など、心の中につぶやきがでます。最初に読んだ時には見えてなかったことが見えてきます。

教科書の文章は限られたスペースに、ぎゅっと情報が詰め込まれたものです。この連載の中に、社会科学の文章は「説明文」として読まなければならないとお伝えしたこともつながります。

教科書の文を冰山モデルで説明してみます。海面から見えている氷の部分が、教科書の記述です。見えている部分は、膨大なこれまでの歴史学・考古学などの研究成果や、教育的な観点から、導きだされた、これだけはずせないという練に練った内容だけが、海面にでているのです。

その文章の奥には、多くの情報が隠れています。



二、何をこそ教えるのか?

日本文教出版の「7 武士による政治の安定 大名行列のようす」を例に説明をしていきます。

「子どもたちに何を教えるのか、何を育てるのか、何を伝えるのか」が問われます。参勤交代の教材では、以下のような事が考えられます。

- ・参勤交代から江戸時代をとらえる。
- ・参勤交代のねらいをとらえる
- ・参勤交代の内容を知る
- ・参勤交代は何のために学習するか
- ・社会科（歴史）に興味・関心を持つ
- ・自分で学習内容を追究する子に育てる

指導要領には、こう書いています。

「(キ) 江戸幕府の始まり、参勤交代や鎖国などの幕府の政策、身分制を手掛かりに、武士による政治が安定したことを理解すること。」

若い頃、先輩によく言われたことがあります。「教材研究する時に、すぐに指導書や赤本を見るな。教科書を読んで自分で考えろ。教科書を読む前に実践が書いてある本も読むな。」若い先生にとっては、なかなかきびしい言葉です。「そんなこと言われても、どう考えたらいいか、さっぱりわかりません。」と私は思いました。言われるように、自分で考えられるようになりたいと思いましたが、最初から無理です。自分で考えつつ、指導書・赤本・実践書「真似」から入れればいいと思います。参考にす

るが捉われないスタンスです。

少しずつ、自分で考えて、指導計画や指導案が書けるようになればいいと思います。でも最後は、自分の力で作成できる力をつけるのだという思いはもって欲しいですね。

三、自分の既習知識を洗い出す

教材研究をする時に、頭の中にある自分の既習知識を洗い出すことをしなければなりません。その教材（教科書）について、自分は何を知っていて、何を知らないかはつきりとさせる。（社会科だけではありません）既習知識にとらわれて、教材をニユートラルに見れないことがあります。まずは、自分の既習知識をはつきりと捉えなす。

私の参勤交代に関する既習知識はこうです

- ・家光がはじめた
- ・一年交代で江戸と自分の藩を往復する
- ・妻子は江戸にいる
- ・大名行列がくると「下にー。下にー。」と声がかかり土下座をしないとイケない。
- ・行列が長い
- ・整然とならんでいる 等々

素材研究をしてくると、自分の既習知識

が最近の説からいうと間違っていたり、不十分だったり、一面的だったりしていることが分かってきます。教材研究の段階ではそれを修正しないと「何をこそ、この教材で教えるべきか」がずれてしまいます。既習知識がじゃまをして、教材（教科書）を深く読めません。

「参勤交代は、家光がはじめた」という私の既習知識は、どうでしょうか。みなさんはいかがですか？

教科書にはこう記述があります。

『参勤交代 家光がつくった制度。』

家光は「大名は、將軍の家来だから、一年おきに江戸に住み、將軍を守らなければならない。」として、武家諸法度に参勤交代の制度を加えました。これにより大名は、江戸での生活や大名行列の費用を負担させられ、妻子を人質にされることになりました。この制度は、大名の力をおさえるのに都合のよい制度だったのです」

そうそう、この内容をずっと学んできたと思いますよね。どこがおかしいの？

次号で、続きをお話します。

学力研 第十七期 先生のための学校・オンライン五回目報告

福島 尚

【講座1】「できる、分かる、つなぐ」

(学力づくりで学級づくり)

井川有香子 「授業・生活の中で書く

活動を大切に」

書くためには字を書く筆圧や文字の大き
さであったり鉛筆の持ち方や聴写ができた
りすることなどの基礎体力が必要と言われ
ています。子ども達がどのくらい書けるか
の目安にもなると言われている基礎体力を
伸ばしていく実践を紹介して頂きました。

授業・生活の中で位置づける。

書く基礎体力を伸ばすためには、書くこ
とに特化するのではなく、日々の授業や生
活の中で位置づけていきます。書く体力を
つけるためには、まず書くことを楽しむ子
にすることが一番大事です。そのためには、
まず書くことに興味をもたせるような取り
組みをしていきます。例えば、【連絡帳に毎

日今日の目標を書く】←【成長ノートに目
標の振り返りを書く】というところを行って
いますが、このときに、振り返りをただ書
くだけでなくテーマを立てて書いたり、内
容を紹介したりすることで子どもが楽しく
書けるようになってきます。

また、授業の中では、思考が見えるノー
ト指導をしていくことで書く基礎体力がつ
いていきます。例えば、算数では答えを書
くだけでなく図や表とあわせて自分の説明
を書いたり、友達のを考えを書いたりなが
らノートづくりを行っていきます。また、
ノートを交流する時間をとることで、振り
返りの書く内容が進化していきます。

このような取り組みをそのときだけのもの
とせず、係活動や委員会活動など様々な
場面で意識して活用していくことで、書く
力が伸びていきます。その際に、子どもだ

けでなく、教師も一緒に楽しむことで、意
欲がクラスの中で高まってきます。書いた
ものについて、教師が評価をすることも子
どもが書きたいという気持ちにつながって
いきます。

書くことを取り混ぜる中で、教師が『つ
けたい力』をしっかり吟味して、どのよ
うな活動をねらっていくか、ただ書かせる
だけとなってしまわないことが大切である
ことを実感させられる講座でした。

【講座2】「教材解釈 授業実践」

(授業づくりで学級づくり)

加藤英介 「教科書を生かす授業」

得意な子は楽しい、苦手な子は楽しくな
いというような意欲格差が見られる授業で
はなく、どの子の力も伸ばすことができる
教科書を使った理科の授業実践を紹介して
頂きました。

まず、教科書で学ぶということは、どの
子どもにとっても『その日にやるべきこと
が明確』『全員が参加できる』『理科の学
習の流れを習慣化できる』←【年間を通し
て同じリズムでできる】ので、子どもが安

心して授業に取り組めます。実際の授業の流れは次の通りです。

①教科書を音読する(学習の課題やめあて、ポイント)

②問題把握・予想を立てる

③実験方法を確認する

④結果を見る

⑤実験で確かめる

⑥まとめをする

このような流れの中で、どの子も伸ばす授業づくりに取り組んでいます。ただ、普段の授業では、実験を行って結果を確かめたり、まとめたりしていると思います。しかし、その流れである、すでに分かっている子が活躍してしまう授業となってしまう、初めて学習する子どもたちが【自分たちにはできない】という考えになってしまします。そこで、先に教科書で結果を見ておくことにより、初めて学習する児童も苦手な児童も同じスタートラインに立って授業に臨むことができます。

例えば、「水溶液と性質」の授業では、教科書の写真をもとに対話を行いながら、問

われていることをノート(愛知県では、教科書に対応した観察・実験ノートを使用しています。)に書き、問題把握を行っていきます。実験方法についても教科書で確認しながら準備を進めていきますが、その際に結果も確認することで見通しをもちながら実験に取り組むことができます。このような授業の流れが子ども同士の交流が活発になる。つまり、どの子も伸びる授業となっていきます。

学習の習慣化を行っていくことで、仲間と共に学んでいく楽しさが生まれ、さらに自分で学びを進める力がつくのだということを実感させられる提案でした。

【講座3】「学級活動や学級会などで

自治を育てる取り組み」

(学力づくりで学級づくり)

鈴木基久「説明文 新教材の扱い方」

説明文の指導の中で大切にしていることは、次の四点です。

①筆者が説明文を通して伝えたいこと

②単元間のつながりを意識した単元計画

③「はじめ・中・終わり」の三部構成で作文を書く

④子どもが学習用語を使えるようにする
筆者が説明文を通して伝えたいことについては、高学年の学習事項の【要旨の把握】ですが、低・中学年でも考える必要があると思います。ただ、低学年で筆者が伝えなかったことを聞いても、普通に授業をしているだけではなかなか答えられない現状があります。その現状を変えるためには子どもたちが自分の考えを書けることが必要です。そこで、ノートに自分の考えが書けるように、子どもたちが授業初めに書いた『筆者が伝えたかったこと』をもとに選択肢をつくり、三択問題を作成するようにしました。上手にできた問題を共有しながらキーワードを提示し、友達の考えを聞いて真似をしてノートに書けるように指導しました。そのような機会をとることで、子どもたちがしっかりと『筆者が伝えたかったこと』を書けるようになりました。

また、三部構成を意識して作文を書かせるために、サンドイッチをイメージさせま

した。例えば、「はじめ」「終わり」をパン、「中」を具に見立てることで、子どもたちもイメージを広げながら取り組むことができました。

そして、来年度から新しくなる説明文教材の分析の中で、新教材について考える価値は主に、①予備知識が無い中でどのくらい教材分析ができるのか、教師としての今の自分の力をはかれる。②初めて説明文を読む子どもの気持ちや困りが分かり共感できる。③新しい教材であっても、共通して大切なことや指導しなくてはいけないことが分かることの三つというお話がありました。このお話をお聞きし、指導を進める中で教材分析だけでなく児童の実態や自己の分析を細かくしていくことで指導の方向性ははっきりするのだと、実感しました。

久保校長先生より

教師の醍醐味は、教科書を自分で分析するところにあると思います。教育で絶対になくしてはならないものは三つあると思います。それは、教師、生徒、教材文つまり教科書なのです。三つのうちのどれか一つで

も欠けてしまうと、学校教育は成り立ちません。教科書を教師が自分の力で分析して子どもに教えるときに、教材を自分で読むよりも先に指導書を読んでもしまうと、指導方法が固定されてしまいます。自分で分析する力をつけていかないと、教育は面白くならないと思います。『自分で教材研究をしよう』、『自分で納得したことを子どもに伝えよう』という思いをもって、授業に臨むことで、子どもと作り上げていく授業となっていくと思います。子どもたちとたくさん意見を交流しながら学んだ後に説明文の構造を自分の言葉で話せるようになる自信がきます。

加藤先生のクラスの子どもが輝いているのは、どの子どもも基本的な知識を持てたことや科学的なものの考え方が身に付いたからだだと思います。導入は教科書ですっきりと説明し進めることで、学ぶことがはっきりしてきます。そして、学習で一番大切なことは、授業の最後にもう一度実験をして確かめたいことが子どもから出てくることです。子どもの考えをもとに、もう一度取り組むことで、授業がさらに深まります。

《受講者の全体感想》

- ・書く体力づくりがあるかないかで一年間の成長は大きく変化するのではないかと考えさせられました。
- ・授業で伝えたことを日常生活で生かしながら、また授業で取り入れていくという相乗効果で子どもたちは伸びていくということに納得しました。
- ・実験の前に教科書で結果を見ておくというのは、目からうろこ！こうして確かな実験に向かわせればよかったのか！と思えました。
- ・新教材と教材研究がとても分かりやすかったです。内容の系統性が踏まえられていて、勉強になりました。
- ・基本的な教材研究ができているのことできていないのでは、来年度の迎え方が変わるだろうと思いました。
- ・教科書を使うことの安定性はどの子の学力を伸ばすに有効だと私も感じます。
- ・ガイドに頼らずまず自力で教材文に向かうことをじっくりとしてみようと思えました。また、年間を見通して要約指導を考えたり、次の学年の教材につなげる意識は自分にはなかったので素晴らしいと思えました。

局長だより 2月

◇学力研最新情報 岸本ひとみ

●やっと「実りの秋現象」

学力研の実践を進めておられるみなさんは、「実りの秋現象」を実感されたことがおありと思います。1学期からコツコツとも学力づくりを継続することができれば、うまくいくと、秋ごろには子どもたちがぐんと伸びていってくれるというものです。

遅ればせながら、ようやく、私のクラスも少しずつその兆しが見えてきました。9月から5カ月なかったことになりすから、実りの秋、ならぬ、実りの冬なのでしょう。

●逆のケースも

2月は、逆のケースも経験した年もあります。もちろん、4月からいわくつきのクラスだったので、すが、いったん11月頃までには、軌道に乗ったかと思わせていても、また2月で、ガタガタ、ぐらぐらしてしまふこともありました。

その学年が終わって、あとで振り返ってみれば、学力づくりが

優先してしまつて、子どもたちの気持ちと乖離してしまつていたことが多かったということもわかつてきました。ただ、渦中にある担任としては、なかなかそのことには気がつきにくいものです。2学期はうまくいっていたのに、どうして?となつて、戸惑いの方が先に立ってしまうのですよね。

●大人になったらわかるよ

渦中で苦しんでおられる先生へのエールです。そんな子どもたちが、大人になってポロリと言つたひとことです。「オレら、勉強、勉強って言われるのが嫌やつて、思い切り反抗したけど、結局、あの時コツコツやったことは、中学校では役に立たんやで。」「高校に入つて、先生にそれを言いたかつたけど、今さら照れくさくて言われへんかった。」「そうやね。あれだけ反抗したらいいにくいわねえ。」「40才過ぎての、大胆告白に、大爆笑したものでした。自信を持つて実践して下さい。きつと、大人になつたらわかります。

◇事務局だより 岡本 美穂

■第17期 先生のための学校

次回で今年度は最後になります。ご参加お待ちしています。

2月10日(土)

テーマは:GIGAスクール構想下での授業づくり・学級づくり・学力づくり

一斉授業不滅の原理

その効率の悪さが子どもの手と脳と仲間を育てる

【自治の力を育てる学級】へ

り・学級会】

全六回開催予定で、今回はその第六回となります。

1:30~1:35 久保斎校長

1:35~1:55 講座1

算数(学力づくりで学級づくり)

1:55~2:15 講座2

社会(学級づくり)

2:20~3:00 講座3

低学年「学級活動や学級会など

自治を育てる取り組み」

3:00~3:30 講評と講話

久保斎校長 まとめ

https://www.kokuchpro.com/ev

ent/8adf016597b91ec5c4514e8a

54e236c3/

■春の先生のための学校

開催決定

毎回100名以上のお申し込みがある大人気講座です。毎日お申し込みがある状態です。

●3月24日(日)

https://www.kokuchpro.com/ev
ent/e19f99052b0cbe5b3c7dc6
1b4766ce/

●3月31日(日)

https://www.kokuchpro.com/ev
ent/37655a94aa317afdl127a9beb
e8bb3fd/

そして、今年度は、5月18日(土)に対面講座を大阪で予定

しています。対面講座のよさ、それは

「感情が揺さぶられる」とい

です。講師の「非言語情報」が

参加者の感情に刺激を与えること

と間違いありません。またお知らせさせていただきます。3

0名限定講座です。「まぐまぐ」

でお知らせさせていただきますので、お見逃しのないようにし

てください。

学力研カレンダー



《各地のサークル・部会 2024年 2月 例会、イベント》

どなたでもご参加いただけます。お誘い合わせのうえお越しください。お待ちしております。

※会場等使用状況により、変更の可能性もありますことをご了承ください。

2/

- | | | | |
|--------------------|---------|-----------------|---------------------------|
| 16 (金) 春日井学力研 | 18時半～ | レディヤン春日井(JR勝川駅) | 山口 080-6904-1697 |
| 17 (土) 大阪教育サークルはやし | 午後 | エルおおさか | 荒井 aik28501@bca.bai.ne.jp |
| 17 (土) みなみ学力研 | 9時半～12時 | 阿倍野区民センター | 図書 nobu580701@yahoo.co.jp |
| (金) いろえんぴつ (加印) | 18時半～ | 稲美町ふれあい交流館 | 岸本 090-9117-6330 |

オンライン開催のサークルには、参加方法を連絡先にお尋ねください。

下記サークルも活動していますので、翌月以降の日程のお尋ね等のご連絡下さい。

- 神奈川学力研 10時～12時 県民サポートセンター704号室 (横浜駅西口) 湯浅 090-1104-4667
- 伊丹学力研 18時半～ ※阪急武庫之荘駅近く 前田 090-9715-3830
- 持ち方書き方研究会 ライン会議で行います。日時や参加のしかたはご連絡を 前田 090-9715-3830

《全国キャラバン等 今後の予定》

○ 学力研・先生のための学校【全6回】

- | | | | |
|-----------------|--------------|------------|--------------|
| 9月 9日 (土) | 13時半～15時半【済】 | 10月14日 (土) | 13時半～15時半【済】 |
| 11月11日 (土) | 13時半～15時半【済】 | 12月16日 (土) | 13時半～15時半【済】 |
| 2024年 1月20日 (土) | 13時半～15時半【済】 | | |
| 2月10日 (土) | 13時半～15時 | | |

○ 1年生講座 (新年度)

3月27日・28日 (水・木) 19時半～ 予定

(詳細はメルマガ「まぐまぐ」、「こくちーず」などで)

(講師派遣希望、サークル情報などは 事務局へ 079-426-5133)

◎今回の特集テーマ「教員不足の現状とその対策」は、今、避けては通れない大きな問題です。教師の善意だけに依拠した対策は、きっとどこかで破綻していくでしょう。何が何でも人を確保する、という義務感を教育委員会には持ってもらいたいものです。(荒井)

ご意見・ご感想は下記まで

- | | |
|-------|-------------------------------|
| 荒井 賢一 | E-mail aik28501@bca.bai.ne.jp |
| 李 詩愛 | E-mail iwamotoshie@gmail.com |
| 堀井 克也 | E-mail katsuya4k1h9@gmail.com |